うまじむら新聞 春号

2021年春発行
馬路村農協

春うらら ウメサク 馬路村。

あたたかい日が多くなり、馬路村の至る所ではウメの花が咲き誇り、すうっと良い香りが漂っています。馬路村でゆず栽培が盛んになる少し前、ウメの木が植えられた歴史があり、その名残として村の中の至るところでウメを見かけることができ、3月はウメの季節となります。

村では「ぬくうなったねぇ」や「まだちっと、ひやいねぇ」と挨拶も日ごとに違いますが、冬と違い皆積極的に外で畑仕事に精を出す姿をたくさん見かけることができます。村の要所では日向ぼっこをしながら立ち話をする人々も。

木々が動きはじめるように、いろいろと動きはじめた馬路村です。

写真は去年の馬路小学校一年生。早いもので5人ももう二年生、次の一年生たちをお迎えする番です。

村の営農日誌

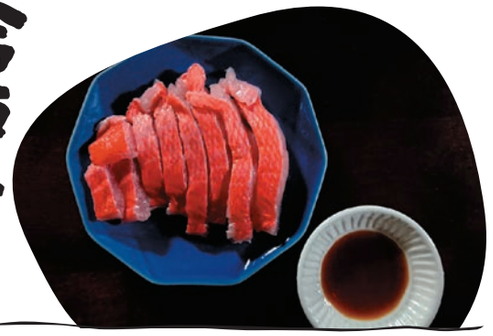
春の恒例の営農作業、「ゆずの新植」。平地がほとんどない馬路村ではありますが、限られた土地に畑をつくり、そこに農協営農班がゆずを植えていっております。ごつごつとした岩だらけの場所を畑につくり替え、土づくりをし、長い時間をかけてようやくゆず苗を植えることができますので、ゆずの新植は一つ目のゴールといったところでしょうか。営農班の顔もどこか朗らかに見えます。これから実の収穫ができるまでは4～5年。馬路村は少ない日照時間や大きな寒暖差など、農作物にとっては過酷な環境となりますので、我が子のようにやさしく育てていきます。村の各畑でも新植や改植用の土づくりの準備が進められ、ゆず苗が届くのを待ちます。「何本頼んだ?」と、この時期のおんちゃんたちの会話にはゆず苗のことが出てくることもしばしば。新植や改植の考え方も人それぞれで、肥料やりや剪定の合間に、ゆず苗談義が畑の中で繰り広げられています。

のぼるちゃんの畑

昼下がり、畑の中でじっとゆずと向き合うのぼるちゃん。「ちょっと、気になってねぇ」剪定、草刈り、肥料やり、春の作業はいろいろとあり、そうした作業の傍らで、のぼるちゃんは一本一本のゆずの木を気にかけ向き合い、世話をしていきます。

今日は特殊な道具でゆずの木の病気になりそうな箇所を少しずつ削っております。素人が見るとどこが病気になりそうか全く分かりませんが、のぼるちゃんには分かるそう。のぼるちゃんの畑では愛情かけて一本一本のゆずの木が育てられておりました。

今夜も柚子で。



太平洋に面さない馬路村でも少し車を走らせれば、豊富な魚を手に入れられるあたりはさすが南国土佐。今日は脂がのってそうなキンメダイに出会った。買った帰り道で食べ方をあれやこれや考える時間もまた幸せだ。より美味しく食べたいと思い、行き着くのはいつもゆずポン酢。軽く湯引きした切り身との相性がたまらない。日常からちょっとした贅沢まで、ゆずポン酢はいつも付き合ってくれる相棒だ。

馬路村への道

うまじむら

高知市から室戸方面に約51km
国道55号線を太平洋沿いに
進むと安田町へ入る。
そして、左に大きい魚らが見えてきたら
左へ曲り、安田川に沿いを
くねくねと上がる。
県道12号線を走る事、20km、
約30分。ようやっと馬路村に
着きます。
ようこそ、馬路村!

馬路村移住

人口850人ほどの村の中でのんびり暮らしてみませんか。移住専用HPでは先輩移住者の声も公開中。

堂々たる田舎 馬路村 移住・定住応援サイト
検索 堂々たる田舎

馬路温泉

ツルツルのお湯です。
ゆっくりすごしに来ませんか。
宿泊やお問い合わせはこちら
0120-44-2026

アメゴ、アメゴ、にちく 馬路村。

【アメゴ】
サケ目サケ科。高知県ではアメゴと呼ぶが、一般的にはアマゴ。馬路村の安田川では、夏は鮎で盛り上がるが春はアメゴの季節。3月1日の解禁日を境に、待ってましたと竿を片手に村人たちは川へと通いだす。立派なものは30cmを超え、塩焼きにすると非常においしい。小さいサイズは唐揚げにして食すことが多い。

釣果はあまり聞いてはいけない、というのが暗黙のルール。良いときは向こうから勝手に教えてくれる。

おんちゃんたちは昔から遊んできた川の地形は事細かく覚えており、「あそこの淵はなぁ」と昔からの経験則でどこに魚がよくおるかをよく知っているため、いとも簡単にひょいひょいっと晩飯前に釣り上げてきて、そのまま食卓にのせたりもし、村人のすごさを感じさせられる。子どもだけではなく、大人も季節ごとの遊び方を知っており、おそらく街の人が見ると羨ましい暮らしをしているのだろうと思う。

フキノトウ

春の山菜としては村の中では比較的早くに見かけることができる。農協ゆずの森では、2月頃から顔を覗かせ、散歩にくる保育園児が見つけてくれる。「トウがたつ」という言葉があるように、育ちすぎると硬くなるため、ちょうど食べ頃を逃さないために大人たちも目星をつけ日々観察している。採れたてを天ぷらにして食べると苦みが口の中に広がり、「ああ、春だ」とこの味が実感させてくれる。その他にも、この季節にはタラの芽やイタドリ、エビナ、タケノコ、葉わさびなど山菜が目白押しとなり、道端でカゴを背負ったおばちゃんを村の中ではよく見かける。

フラフ

馬路村では子どもがおる家はこいのぼりと一緒にフラフと呼ばれる大きな大漁旗のようなものを掲げることが多い。そのため、竿も大変立派なものとなり、とても一人では準備ができない。近所の人たちを呼び、何人かで竿を立てることも春の風物詩といえる。「この日は空いちゅう?」という質問だけで、「ああもうそんな季節か」と察しをつけ、当日は竿を上げ終わっても帰る素振りもなく会話が続き、そのまま飲み会に突入することもしばしばしば。フラフの竿上げはおんちゃんたちのコミュニケーションの場でもある。

わき水

馬路村は急峻な山々に囲まれており、谷からは豊富な水が流れてくる。冬の間は水の量も減り、少し落ち着いた雰囲気であったわき水も、春が近づくにつれ勢いを増し、躍動感を感じるようになる。この、春のわき水でつくるコーヒーは格別の味。村に住む贅沢を存分に感じることができる。

畑

春の畑は主に剪定、肥料やりなどが主だがあたたかい日差しを浴びたからか雑草の伸びるのも早くなってくる。馬路村のゆず畑では除草剤は使用しないため草刈り機でひたすら刈っていく作業が春からはじまる。ブーンという草刈り機の音が畑から聞こえ、草の香りを感じると、季節の変わりを実感する。毎年の「草刈り一番乗り」はだいたい人は決まっており、「もう刈りよったなぁ」と春の話題ともなります。